

京都市立芸術大学デザイン科再編資料

京都市立芸術大学美術学部デザイン科では2023年度より、新しい体制をスタートさせます。これまでのビジュアルデザイン・環境デザイン・プロダクトデザインの三専攻を一つの専攻に統合するとともに、新たな領域となる専攻を設置し、二専攻体制に変更します。

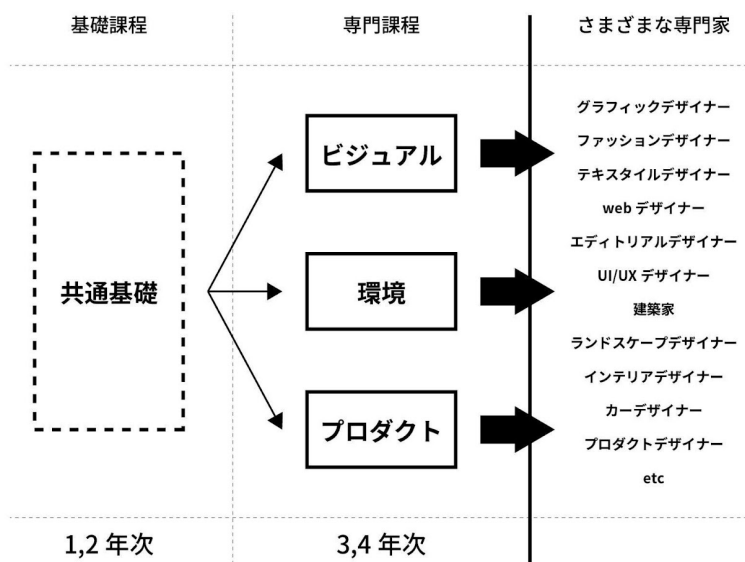
1. 沿革

京都市立芸術大学は、1880年に創設された京都府画学校を起源とする公立の芸術系大学としては日本でもっとも長い歴史をもつ大学です。

デザイン科は1939年に京都市立絵画専門学校の図案科として始まり、1950年以降、基礎課程から始めて専門課程にすすむ近代デザイン教育の基本的枠組みを取り入れながらも、上野リチ・伊三郎両教授による指導のもとウーン工房の影響を受けた表現と感覚を重んじ、日本のデザイン教育において独自の立ち位置を築きあげてきました。

そして、1982年のデザイン科発足から現在に至るまで、1年次から2年次にデザインの共通基礎を行い、3年次以後、ビジュアル、環境、プロダクトの専門課程に分化しデザインの諸領域の専門家を育てる専攻体制で、デザイン教育を実施してきました。

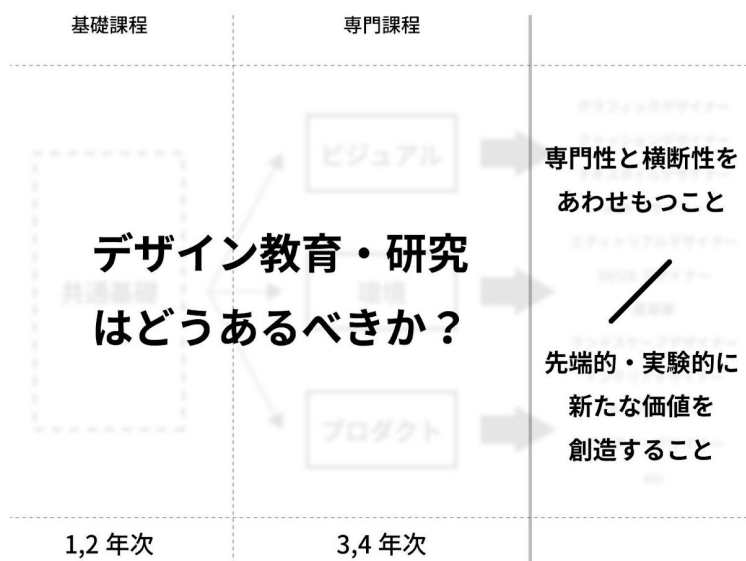
2. 課題



近年、さまざまな領域でデザインの発想法や考え方が注目を集め、デザイナーの役割が地域のコミュニティづくりやオンラインのサービスづくりなど形のないものにまでおよび、デザインの社会的意義は根本的に変わってきました。そのような中、これまでのグラフィックデザイナー、建築家、プロダクトデザイナーなどといった専門性だけではなく、柔軟で横断的に活躍するデザイナーが今日の社会にとって必要になってきたといえます。そして、デザイン教育もこういった時代の変化に対応したものに更新する転換期にきているのではないのでしょうか。

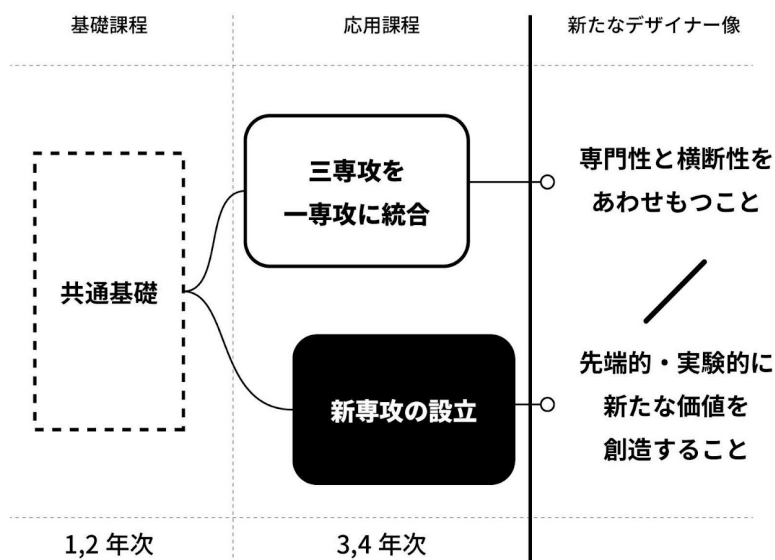
また、現在を生きるわたしたちは環境問題をはじめとして様々な社会問題を抱えています。いうまでもなくデザインは、生産と消費をはじめとするわたしたちの社会システムに深く関係しています。で

は、われわれ全人類が解決すべき課題に対して、デザインは何をすべきでしょうか。京都市立芸術大学では、このことに対して、デザイン教育および先進的な実験や研究を行う場として真摯に向き合っていきたいと考えます。



3. 再編

本学は、1980年から拠点としてきた西京区大枝沓掛町から、2023年に京都駅東側の崇仁地域へ全学的な移転が行われます。今日の芸術大学のあり方を問い直す考え方で計画された新キャンパスのほか、移転に合わせあらゆる次元で教育・研究環境の刷新が行われます。デザイン科では、2014年度に、デザイン科の将来を見据えて科として専任教員を1名増員しビジュアルデザイン専攻に配置しながら、デザイン科の将来の組織づくりにおいて、1専攻へ集約する検討から始まり、様々な組織体制を検討して参りました。2017年度からは、デザイン科将来構想検討チームを組織し移転後のキャンパス計画と並行して、約半世紀にわたって続いてきたカリキュラムを見直してきました。そしてこの度、専門性の協働や横断性が求められる社会の要求に応える形で三専攻を一専攻に統合する「総合デザイン専攻」と、既存の枠組みや概念を超えてより実験的かつ先端的なアプローチで取り組む専攻「デザインB」を新設し、これら二つの特色ある組織を並走することで、変化の激しいこれからの未来社会に備えて、様々な専門や新たな価値を常に取り込むことができる体制を整備し、継続的に新鮮なデザインの教育・研究を実践することが可能になるデザイン科を目指し再編いたします。



3.1. 「総合デザイン専攻」 Integrated Design Specialities

専門性を横断する | これまでの三専攻を一つの専攻に統合 |

これまでデザイン科は、基礎課程から専門課程へという近代デザイン教育の基本的な枠組みを背景に、ビジュアル＝「平面」・環境＝「空間」・プロダクト＝「立体」と、専門性による区分で専攻を運用してきました。この専門性を重視した教育のあり方は、基礎から応用へのデザイン力を育む最も有効な手段として、これからも本学デザイン教育の一つの確固たる教育・研究であると捉えます。一方で、コミュニティデザインやサービスデザインなど、近年あらわれたデザインの新領域においては、複数の専門性を持ちながらしなやかな発想で人や物や環境のあいだを横断していく能力が必要となります。そこで、この度のデザイン科再編では、これまでの専門性による区分を緩和すべく三専攻を一つの専攻に統合し、統合された専攻内に各専門のゼミを配置する「総合デザイン専攻」を設立します。

「総合デザイン専攻」において実施される様々なゼミ横断カリキュラムにより、学生は所属ゼミを軸にして専門性を深めながらも、他領域と共同しプロジェクト運用をおこなうことで、高いレベルでの統合的なデザインの成果を引き出す能力を身につけることを目指します。

名称について「総合デザイン専攻」（英語表記：Integrated Design Specialities）

近年のデザインが社会の中で求められる専門は多様化しており、ビジュアル、環境、プロダクトといったこれまでの領域では区分しきれなくなってきました。また、社会の諸問題を発見・解決するときにも、それぞれの専門が融合し協働することにより総合的にデザインを構築することで解決を求められることが多くなってきており、これまでも、多摩美術大学では2014年に設置された「統合デザイン学科」や、慶応義塾大学の「総合デザイン工学」、2023年度再編予定の金沢美術工芸大学の「ホリスティックデザイン専攻」（ギリシャ語で全体を意味する）など、デザイン研究の分野では、このような考え方が大きな流れになってきています。また、この度の再編にあたり、長期的に安定的な教育研究基盤を構築したいという考えにより、名称は極めて一般的な表現が望ましいとの観点から、「総合デザイン」の呼称を採用することとした。欧文表記においては、専門がお互いに融合し協働することで実現するデザインの考えかたを明確に伝える表現を採用し、「Integrated Design Specialities」としました。

3.2. 「デザインB専攻」 design B

新たな価値を創造する | 先端的・実験的な新専攻の設置 |

産業化や国際化から近年の情報化にいたるまで、人間社会をより良くする近代以後の様々な取り組みは、わたしたちに便利で豊かな暮らしを提供してきました。その一方で、近代化が生み出した環境問題をはじめとする様々な社会問題は、現在生きるわたしたちが将来を考えるにあたって重大な課題を突きつけてます。言うまでもなくデザイナーは、生産と消費に深く関係し、現在の社会問題における当事者の一人です。デザイン科では、このような社会が抱える課題に対してデザインとして何が提案できるか、既存の枠組みや概念を超えて、より実験的かつ先端的なアプローチで取り組む専攻「デザインB」を新設します。学生は、異なるテーマで設定されたユニットを自分自身で選択しながら、既存のデザイン領域だけでは捉えられない様々な諸問題に取り組み、デザインの意味と役割を拡張することを学びます。これからの未来を切り開くプレーヤーとして、社会の中にある未知で未解決の課題を発見する能力を養い、従来のデザインの手法だけではなく、独自性、革新性と批評性を重視し、学生がコンセプトから実用的な解決方法までを自分たちで考え実行できるようになることを目指します。

名称について「デザインB」（英語表記：design B）

専攻名であるデザインBの「B」は、「生成変化」を意味する、“Becoming”から頭文字を借りています。これは必要に応じて自分たちを組み替える私たちの姿の描写として、あるいはデザインの常に、新しく生まれ、進化し変化していく営みの形容として適切な表現であると考えています。

それ以上に、デザインのアウトプットやデザインのあり方を「これである」と指定しないメリットがあります。新しいデザインB専攻では、常に変化に適応しつづけられるデザイン教育のシステムの構築と絶えず変化していく新しい社会実装の形を実験的に模索していきます。

Bと省略したのは、あえて、学生が何を学べるかわからない環境に自分の身を置く、つまりは自分で自分の学びを主体的に創造していきたい、チャレンジしたいという資質をもった学生に、デザインB専攻を選択してもらいたいからです。デザインBでの学びを通して、不透明で分かりにくいこの現代社会を生き抜く能力、デザインする力を身につけてもらいたいと考えています。